

ONE LOVE

通信

55号

2015年9月27日発行

今回も無事に日本滞在を済ませることができました。それぞれの地でお手伝いをしてくれた皆さま、話を聞きに来てくれた皆さま、どうもありがとうございました。

8月にルワンダに戻り、いつも通り義肢製作やパソコン教室の運営を進めております。

今回の滞在は、ガテラにうれしい贈り物がありました。これから5年後2020年に向けて、新しいワンラブの挑戦が始まります。そのためには皆さまの応援が必要です。さて、その挑戦とは？ ワンラブ通信、読んでみてね。



【日本の夏、出会いと再会】

5月中旬から7月末まで日本に戻りました。最近寒い時期に行くことが多かったので、久しぶりの暖かく、もしくは暑い季節の帰国となりました。

日本に戻る前に活動の話をさせてもらえそうな人たちにメールで連絡をします。過去に訪ねた学校や組織などです。更にフェイスブックを使って帰国のお知らせをします。そしてひたすら返事を待ちます。そうするとポツリポツリと声がかかってきます。自分の手帳にそれらを書き込み大まかなスケジュールを作ります。

いつも私たちは間際にならないと帰国の時期がはっきりしないため、「もう少し早く連絡をもらえれば呼ぶことができるのに…」という残念な答えをもらうこともしばしばあります。

そんな感じでスタートする日本滞在ですが、今回は自分たちの実力・体力を過信してスケジュールを詰め込み過ぎて、最後の方は夏の暑さと疲労で虫の息でありました。

それにしても日本の夏はいつからこんなに暑くなってしまったのでしょうか？子供の頃はクーラーなんてなくてもへっちゃらだったけど、この暑さは尋常ではありません。

さて今回の滞在は思いがけない出会いや偶然の再会も多かったです。

胸ときめいてしまった再会の一つ。地元茅ヶ崎駅から乗ったタクシー。運転手さんはず～っと前（20年以上）に茅ヶ崎海岸でガテラを見かけたそう。話をしているうちに「んっ？何か共通することが多いな」と思うような内容がポロポロと出てきて、最後に名刺をもらったら、その名前を見てびっくり。何と中学生だった時にあこがれていた先輩だったのだ！いや～、これは何だか恥ずかしかったぞ。秘かに木の陰から、ドキドキした眼差しで見つめていた先輩ではありませんか！

それから札幌での出来事。生まれて2度目の北海道であったが、大学受験の予備校に呼ばれた。予備校の前にいた一組の母と子。子供はどうやら黒人とのハーフであるようだ。「ああ、札幌にも黒人をルーツにした子供がいるんだな」

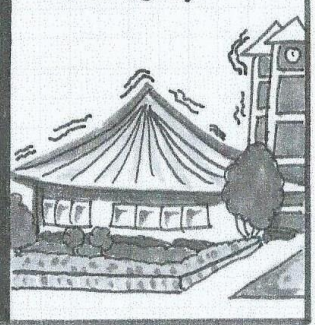
Bibi真美のルワンダ・ブルンジ日記 第43回



目指すは、2020年東京オリンピック出場。可能性は、まだまだこれから!



8月、ルワンダに戻り数日後、マゲニャート5の地震がおきました...



ワンラブランドの木の屋根が全て落ちてしまった...。怪我人がいなかったのは不幸中の幸いでした。修理のためはまた立っていません。皆と力を合わせて、この困難を乗り越えなければ...



9月、10年ぶりの再会があった。滋賀会で開かれた地震をなくす為の会議に、連れて来た。↓



アメリカで負けた後、今はルワンダで木のマネージャーとして働く彼。自分の人生を確実に歩んでいる姿を見て、とてもうれしかった。



と、ふと母親の顔を見ると…。

それは何年か前、ルワンダの男性と恋仲になり、子供を授かり、しかし最終的には二人の関係は終わり、まだ小さい赤ん坊を連れて日本に戻ったCさんであった。彼女はルワンダにいる時、赤ん坊を連れて、しばらくの間ワンラブで子育てをしていたのである。ワンラブのスタッフは、彼女とその子のことをとても大切にしていた。

だからこの再会がうれしかった。その後彼女がどう暮らしているか、ガテラは気にしていた。日本に戻るたびに、元気に暮らしているだろうか？子供は大きく育っただろうか？とガテラは彼女の消息を追っていた。その彼女と息子が目の前にいる。全く予想していなかった再会だったので、それに気がついたときに思わず涙が出てきた。

あの時の赤ん坊は立派に育ち、そして頼りなげに見えていたCさんはたくましくなっていた。1人で子供を育てる、それだけでも大変だったと思う。まして肌の色の違う子を日本で一人で育てるといふこと。それを彼女は立派にやり遂げていた。彼女の子育て、そして小学生になったG君の多分波乱万丈であろう人生に、私たちもエールを送りたい。

日本に行くと、四季があることにも感謝する。例えば緑。電車であちこちを回り、そのたびに車窓から見える緑が目眩しかった。例えばそれは田んぼに植えられた稲であり、山の木々であったり。しかしその緑に一番感激したところは湯布院だ。



湯布院の金鱗湖にて。
いや、本当に緑がすごかった！
そして温泉もとろけて
しまいそうだった。

以前から一度行ってみたいと思っていた場所であった。ケニアのスワヒリ語学校の先輩でもあるYさんが、ワンラブ九州の陣を一手に引き受けてくれ、その中に湯布院があったのだ。駅に降りてここでもびっくり。目の中に濃い緑の由布岳がど〜んと飛び込んできたのだ。

ルワンダでも緑は充分に見ていたつもりだが、この由布岳の緑は気持ちよかったなあ。こんなところで生活ができる人は幸せだなあ。そして湯布院と言えば温泉。これもたまらなかった。目の前には由布岳。こんな贅沢をして良いのだろうか？

それから前号で書いた、ルワンダに来てくれた長野の小学生との再会。最も彼らは3月に小学校を卒業し、中学生になっていたが…。長野に前泊し、あの時のメンバー、校長先生やご家族の人を交えての宴会。4人の子供たちは、単に子供と呼んでしまうには申し訳ないような輝きがありました。中学生になり、自分のやりたいことに向かって進んでいく姿を見て、急に大人になってきちゃったような照れを感じてしまう私。暖かく迎えてくれる彼らを見て、長野にも自分たちが帰ってこられる場所ができたようで、本

当にうれしい。

そして今回は見えないものの力、あるいは神と呼んでもいいのかもしれない、そんな奇跡にも近い喜びがあった。

毎年京都を訪ねるが、その時に手伝ってくれるワンラブ関西と呼ばれる集まりがある。中心になっているのはYさんという男性であるが、いつも凜とした奥さんがそばにいる。今年の4月、その奥さんが倒れて、非常に危険な状態になってしまったのだ。私はルワンダに吉田家の仏壇を持ってきていて、毎朝お祈りしている。苦しい時の神頼みと言われてしまえば全くその通りの状態なのだが、この時は祈った。また必ず会えるようにと。

ああ、そして京都で活動報告会を開いたとき、彼女は来てくれたのだ。倒れてから初めての外出だという。少し痩せてはいたが、面影は私が知っているそのままで、再びこうして会えた喜びで泣きたかったが、彼女が先に泣き出してしまったので、かっこつけて涙をこらえざるを得なかった…。この世からいなくなってもおかしくなかったような状況の中から、彼女は生還したのだ。よっしゃ〜！



文章とは全く関係ないが、映画村に行ったときの一コマ。
ガテラ meets
忍者なのである。。

また、静岡に行けば、いつも気持ちの良い面々が私たちを待っていてくれる。Tさんという古稀を迎える女性のチャリティコンサート。帰国のタイミングが合えば、いつもこのコンサートに呼んでくれる。そして静岡で張り切るのはやはりスワヒリ語学校の先輩であるHさん。彼女の作るおむすびと唐揚げは絶品。ついつい4つも5つも食べてしまうのだ。Tさんのコンサートは愛に満ちていて、いつも感激するのだが、今回は私のためにも一曲歌ってくれ、涙腺が崩壊。

そんなこんなで日本滞在中の数々の出来事は、全て書くことができないくらいだ。ここに書かれていない滞在中に出会った人たち、決して感激がなかったわけではないのですよ。書くスペースがなくてごめんなさい。

そんな日本巡業をしていると、やはり私たちは幸せだなあと思わずにはいられない。行く先々で待ち受けてくれる人たち。ルワンダにいと時々孤独を感じることもあるが、この思い出をもってルワンダに帰れば、また1年続けていけそうな気がする。

また今回は、父が亡くなってから、仲たがいをしてしまった家族との関係を少し修復することができた。そしてそのきっかけとなったのは、茅ヶ崎に住む叔父と、帰国の際は茅ヶ崎を拠点としている私が、偶然仙台の駅で会ったことだった。

やっぱり出会って素晴らしい。そう認めざるを得ない日本滞在でありました。

【よっしゃ、やるぞ！】

ガテラへのうれしい贈り物。

それは車いすマラソン用の車いすである。2020年の東京パラリンピックのことをガテラと話していたら、ガテラがおもむろに「俺も出たい」と言い出した。ふ～む、ならば何の競技で出るか？あれこれ考えてみたが、カッコいい車いすに乗る競技が目立って良いのでは？…などとやっているうちに「東京パラリンピックには車いすマラソンで出る」という結論が出てしまったのだ。

しかしその車いすは高い。とてもじゃないが買うことはできない。ならば協力を求めようということになり、行く先々で車いすを手に入れられないだろうか？ということ人を人に問いかけた。

その結果、車いすマラソンの選手が、一台譲ってくれることになったのである。いや、うれしかった。思わず小躍りをしてしまった。実際その車いすに乗ってみて、普段は仏頂面しているガテラも、笑みを漏らしたくらいだ。

ルワンダの障害者は（障害者に限ったことではないが）とても良いものを持っている。もろもろの才能・素質を持っているという意味だ。しかし残念ながら、ルワンダはまだ情報や物が充分にないので、それらの素質を生かすことが難しい。

常々、そんな彼らにチャンスを作ることができたらいいなと思っている。そして一つのチャンスとして、2000年のシドニーパラリンピックの出場を期に、ルワンダの障害者はその後もパラリンピックへの出場を果たしているのだ。

しかし！

パラリンピックに車いす競技では一度も出たことがな

いのである。だったらそれに挑戦しない手はない。

想像してみてくださいよ。ルワンダの競技場を、あるいはどこかの国の道路を、ガテラがあのかっこいいレーサーと呼ばれる車いすに乗って疾走している姿を。内輪ぼめと言われてしまえばそれまでだが、結構いい線行っていると思いませんか？

障害者がその姿を見て、「おっ、俺もやってみたい」と思ったらしめたもの。彼らがそれに関心をもって、さらに広がっていったらそれで充分。そこでまた新しい可能性が広がってくる。



ガテラ、早速レーサーに乗り込むの図。
左は寄付してくれた服部さん。大分車いすマラソンには一度も休まずに出場しているそうだ！

そんなわけで手に入れたレーサー。東京パラリンピックを目指し5年をかけてトレーニングです。果たして本当に出られるのかしら？もちろん「出るぞ！」という方向で動くけれど、最初の目的はそれをルワンダの障害者に知ってもらうということ。後に続く人を見つけていくこと。

皆さん、ガテラが車いすマラソンに出たら応援してくださいね。60歳からの挑戦。可能性はまだまだこれからだ！私もこうしちゃいられない。日本で増えた体重を減らすために、今日から筋トレだ！目指せ、5キロ減！



ルワンダ事務所代表ガテラより

【目指すは2020年東京パラリンピック！】

ずっと探していたものが見つかった。それは車いすマラソン用の車いすだ（レーサーと呼ばれるらしい）。

俺は昔からスポーツが好きだった。足が悪いので、上半身を使うスポーツ、例えば平行棒を使った競技。そして日本でもルワンダでもジムで汗を流す。ルワンダの虐殺が起こる前は、障害者を集めアクロバットのチームも結成した。ルワンダでまだ障害者スポーツが全く行われていなかった頃だ。

そしてひょんなことから車いすマラソンがあるということを知り、いつか自分もやってみたいと思っていた。

しかしその車いすは障害に合わせて作るので、とても高価な物だった。100万円以上することもザラだという。

日本のあちこちで活動の話をするときに、来てくれた人たちに呼びかけた。「マラソン用の車いすを探しています」と。

すると一人の両足切断の男性が名乗りを上げてくれた。自分が使っていたレーサーを譲ってくれるという。

これはうれしかった。滞在中で一番うれしかったかもしれない。それはまぶしい黄色のレーサーだった。いくつもの車いすマラソンに使われた、百戦錬磨のレーサーだ。

早速これで練習開始だ。

目指すは2020年の東京パラリンピック出場！

その時自分は65歳になっている。肉体的にはきついかもしれない。でも目標はとりあえず高く持とう。まずは日本国内で行われる車いすマラソンだ。

既に自分の中で想像が膨らむ。日本のワンラブ支援者が沿道に集まり、ルワンダの旗を振って応援してくれる様子を。それはとても興奮する光景ではないか。

常日頃思うのだが、ワンラブを始めてから自分たちはいつもワンラブの夢を日本の人に伝えてきた。届かないと思える夢でも、とにかく話をしてみた。そうするとどこからか賛同する人が出てきてくれ、協力をしてくれる。今回もまさにそうだった。だから思いを伝えるということはとても大切で、共感する人の存在がその先の勇気につながっていく。

夢がかなわなくても、少しでも近づくために、俺はこれからも自分の考えを人に伝えていきたい。

2020年の東京パラリンピックを目標に、新しい挑戦がスタートする。俺個人の挑戦かもしれないが、それによってルワンダの障害者の可能性が広がっていくように、皆さん、ぜひ応援のほどを！俺はやるぞ！

【体内時計が狂うということ】

今回の帰国にはエチオピア航空という飛行機会社を使いました。なんでも4月から日本直行便が出ているという。乗換えの時間が長かったりで、日本へ行くのは体力勝負なのだが、直行便なら多少フライトが長くても楽だろうと思って買った航空券。しかもちょっと安めであったし、就航したばかりだから、きっとサービスもよからうと思っていただけが…。

これが悪夢の始まりである。

キガリを出て、エチオピアのアジスアベバへ。次のフライトの乗り継ぎカウンターに行ったら…。「お前たちの便はキャンセルになった。従ってデリー（インド）へ飛べ」むむっ、そうであるか。アフリカじゃけん、そういうこともあるだろう。デリー便の航空券を待つが、搭乗時間が終わってしまった。「デリー便は満席だ。上海へ飛べ」よし、ということか、上海の方が日本に近いし、そこからすぐに成田に行く便を手配してくれればオッケーだ。

上海へ飛ぶ。乗り継ぎのカウンターに行くと、「成田までの便は手配されていない。従って今日は上海に一泊すべし。その代り明日朝一の便で成田まで飛べる」わかった、ではホテルに案内してもらおう。

翌朝、不穏なものを感じた二人は早めに空港へ。「成田行きの便は取れていない。いつの便が取れるかわからない」ここで完璧に怒りモードにスイッチが入った私。「とにかく日本へ帰らせろ。もたもたするな！」

実は今回はガテラも私もルワンダで体調を崩したままの帰国だったので、この時点でもうヘロヘロなのである。

そんな騒動の後、無事に成田に着きましたが、当然自分たちのカバンは到着しておりません。結果として3日後に受け取りました。

で、今度はルワンダへ帰る。往路のことがあったので、慎重になっている私たち。成田に3時間前に到着し、搭乗手続きを待つ。しかし予定の時間になっても、カウンターは開かない。というより、中にいる人たちが、やたらと電話をしまくっている。不穏なものを感じ、ガテラに言う。「なんだかカウンターの中の動きが怪しい。夜も遅い便であることだし、もしこの便が飛ばないとなったら、今日はここに缶詰めだ。だから念のために食糧を買っておこう」おにぎりやハンバーガーを買って、万々に備える。

数時間過ぎてから、案の定「今日の便はキャンセルとなりました。つきましては成田のホテルに一泊してください」…まただ。しかも「次のエチオピア航空の便は3日後です。運よく他社の便が取れば、明日飛べますが、最悪3日後になります。つきましては、一度自宅に戻れますか？それともこのままホテルを取りましょうか？」と来た。

既に自宅の鍵はボランティアに郵送してしまっているし、大量の荷物を宅急便代をかけて、再度自宅に送る気持ちの余裕などない。だからホテル泊を依頼した。

しかしこの時間では、もうホテルのレストランは閉まっている。さっきおにぎりやハンバーガーを食べたが、あんなものではちっとも足りないし、何も食べずに搭乗を待つ

ていたお客さんたちがたくさんいるのである。

そこで航空会社が用意してくれたもの。菓子パン2つにカップヌードルと水…。空港難民になった私たち。贅沢は言っただけだが…だ…。

しかしやはり日本の対応は、丁寧であります。ありがたいことに、翌朝「今日の11時の便に振り替えました。それまでに空港に行ってください」

そこからバンコクとアジスアベバで乗り換え、キガリに到着したのであります。しかしここでもやはり荷物は届いていない。手元に届いたのは（と言っても、自分でキガリの空港まで取りに行くのだが）2日後であった…。

つまりこの航空券は日本直行を歌ったわりには、ちっとも直行ではなく、各駅停車だったということですね。

日本に到着して、1日は部屋の掃除や食料の買い出し、1日はもろもろのスケジュールの調整と思って、2日間のオフを取っておいたのだが、行きも帰りもまるまる1日遅れで目的地に到着したので、体内時計が狂って、その後滞在中はずっと調子が悪かったのである。

う～ん、おそろべしエチオピア航空。また利用することは…、多分ほとぼりが冷めるまで、しばらくはないだろうなあ。

こんなふうにと書くと、「エチオピア」とつくものはすべて否定したくなるが、インジェラと呼ばれるエチオピア料理は絶品であるということを付け加えておきたい。



紹介します！ワンラブのスタッフ

前号に引き続き、スタッフではありませんが、ワンラブに関係した女性のお話。

先日、ガテラのおじさんが亡くなった。御年93歳。大往生である。ルワンダに昔からある車屋さんで料理人をしていた。近くに住んでいるものの、おじさんはおじさんで、私は私で日々慌ただしく、一度もおじさんの手料理を食べたことはなかったけど、ルワンダ料理、西洋料理、何でも作れるコックさんだったらいい。

そのおじさん、少々体調がおかしいと、病院に行き、念のため入院しようということになったものの、あつという間にその日に亡くなってしまった。

ルワンダで人が亡くなった場合、大体7日間喪に服す。その間にお葬式を済ませるのである。人望厚かったおじさんのお葬式には、たくさんの人が訪れ、思い出話をしたり、その死を悲しんだり…。

そして最後の喪明けの日、ワンラブの庭に親戚一同、友人などが集まって最後の儀式をした。牧師さんのお話とか、歌を歌ったり、おじさんの武勇伝を話したり。

そういう時には、大体ソーダ（コーラやファンタなどのソフトドリンク）が配られる。みんなに配って回るのは、親戚の若者たちだ。一人一人に何が飲みたいかを聞きながら配っている。

私の番が来た。目の前にはかわいい笑顔のお嬢さん。英語で「何を飲みますか？」既にさっき1本ソーダを飲んでしまっていた私は「さっき飲んだから、もうお腹がいっぱいです。どうもありがとう」と答えた。すると「10年前、あなたは私を日本に連れて行ってくれましたね？」と言うではないか。

まじまじと顔を見る。え〜と、何のことだ？誰だ、一体？「私、ローズマリーです」おお！何ということだ。それは2004年、滋賀県で「地雷をなくそう！世界子どもサミット」というのが行われたとき、ルワンダから連れて行った、当時高校生だった女の子だ。

いやはや、すっかりきれいな女性になってしまっているではないか。髪の毛も、あの時は角刈りだったが、今はクリンクリンして、何とも女らしい。



あれから10年。素敵な大人の女性に成長したローズマリー。

10年の歳月は女性をこんなふうに変えてしまうのである。あれから彼女は勉強のためにアメリカにわたり、数年そこで過ごし、今はルワンダに戻ってきているという。

しかもお母さんが運営しているホテルのマネージャーをやっているらしい。

思わずうれしくなって、一緒に写真を撮ってしまった。いや、これだから私たちが年を取るのも無理はない。

その日、ソーダを配り終わった彼女は、しばらく親戚や友人とおしゃべりをしてしたが、「これから仕事に戻らなくちゃいけない」と言って足早に去っていった。

今度、彼女の働いているところを覗きに行ってみよう。とてもしっかりものに見えたローズマリーは、今もしっかりもののまま、自分の人生を確実に歩んでいるようである。

【災難は忘れたころにやって…来ないでください…】

ワンラブランドが2年続きで、敷地内を流れている川の氾濫による洪水の被害を受けたことは、以前のワンラブ通信でお伝えしたとおりであります。また試練が降りかかってきてしまいました…。

ルワンダに戻って数日後、夜中に地震を感じました。マグニチュード5ほどの地震だそうです。コンゴには活火山もあるため、その影響のようです。私がルワンダで生活をするようになってから感じた地震は2度。今回は3度目となります。寝ていたせいもあるかもしれませんが、結構大きく揺れたように思います。ただその時は何も被害がありませんでした。

しかしその数日後。私は日本から来たツアーのお客さんと一緒にルワンダの南部に泊まっていました。一日の仕事が終わり、ガテラに報告をするため電話をすると、声に張

りがありません。

「この間の地震で、ホールの屋根が全部落ちた…」このホールとは、福島の人たち並びに外務省の資金援助を受けて出来上がった場所で、会議や結婚式など、たくさんの人が集まる行事の時に使っていたものです。

その一言を聞いたとき、電話をつかみながら、首筋がキーンと痛く、熱くなりました。辛いことに直面したとき、最近はずこくなるのであります。

翌日ワンラブに戻って建物を見てみると、見事に屋根が全部落ちていました。床の部分には落ちたトタンや木材が散乱しています。

こうなると悲しいなどという感情より、笑ってしまいたくなるのであります。そうでもしないとやってられないのですよ。力なく笑う私。それを悲しそうな目で見るとガテラ。

ああ、神様、あなたはどのように私たちにばかり天災を見舞うのでしょうか？やっとう洪水の被害から立ち上がって、再スタートを切り、通常の仕事が続けようとしているのに、なぜまた私たちなのですか？



屋根がすっかり落ちてしまったホール。床に散らばる木材たち。しかし誰も怪我しないで良かった…。

しかし屋根が落ちた時、中に誰もいなかったということとは不幸中の幸いであつたとしか言いようがありません。結構な量の木材やトタンを使っていたので、その重量はかなりのものです。例えばそこで結婚式が行われていて、その時に屋根が落ちたとなったら大惨事につながっていたことでしょう。オーバーな表現ではなく、死者も出ていたと思われる。

あるいは私たちがまだ日本にいる時に屋根が落ちてしまっていたら、ルワンダに残したスタッフだけで対応（瓦礫の処理など）はできなかったと思います。

そのホールに義肢製作所と受付が併設されているのですが、義肢製作所は無傷でした。しかし受付は屋根の部分が一部剥がれ、天井が歪んでしまいました。

だから受付は急遽、義肢製作所の横にある材料倉庫の中に移されました。しかしそこは薄暗いので、光の入ってくる通路に机を置いて、半ば青空受付のような形で運営を続けております。それはそれで外の空気が吸えて気持ち良さそうなのですが、修理のことを考えると、そんなふうに能天気考えることはできません…。

あ〜あ、全く人生は試練だらけだ。ホールの屋根も直したいけど、経済的に今すぐすべてを直すことは不可能。困ったものだ…。

だからワンラブランドに遊びに来た皆さん、屋根のない建物を見ても驚かないでください。やはり自然の力は強いんだなあ。



日本事務所より

無事に日本滞在を終えることができたのも、ワンラブの活動を支援してくださった皆さまのおかげでした。

正直なところ、日本へ向かう飛行機の中、いつも私は憂鬱な気持ちでいます。ああ、これからたくさんの仕事をやらなくてはいけないんだなあとか、活動資金は集まるだろうかなどと考えて、とても気が重いのです。

でも実際に動き出して、いろいろな人に会っていると、不安な気持ちが段々と減ってきて、「何とかなるさ」という気持ちになってきます。

今回は例年よりたくさん話をする場を持つことができ、体力的にはかなり疲れました。多分夏の暑さもその原因。アフリカは暑いと思っている皆さんも多いかと思いますが、ルワンダは暑くありません。20～30度を行ったり来たりする気温ではないでしょうか。だから最近の日本の夏の暑さなんて想像できません。ガテラもさすがに堪えたようで、家に戻るとまずはシャワーを浴びて、疲れを取ります。

そんな疲れを癒してくれたのは、皆さんの温かいおもてなしでした。花やお菓子を持ってきてくれたり、私たちが余分に動かないで済むように、みんなせっせと役割分担をして動き回ってくれました。また終わった後においしいものをごちそうしてくれたり…。

本当にワンラブを支援してくださる皆さま、どうもありがとうございました。お疲れさまでした。

私は日本に戻ると必ず太ります。日本では電車を使うので、階段を上ったり、歩き回ったりするので、多分ルワンダにいるよりも運動量 ー5ー います。また日本にいるからと言って、日本食を暴飲暴食をするわけでもありません。それにもかかわらず、必ず太る。いつも大体 5 キロ増という感じでしょうか。

ルワンダの土地を好きだと思ってはいるものの、私の体はどこかで日本を求めてしまっているのかもしれません。8月にルワンダに戻り、いつも通り動いていますが、まだ体重が減る気配は見えません。まあ、いいか。

それでは皆さま、また来年、会いましょう。あるいは皆さま、ルワンダに会いに来てくださいね。

【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信54号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（12月～3月）

4月	250,054円
5月	693,805円
6月	902,862円
7月	1,440,830円

このおかげで、ルワンダとブルンジ合わせて、次の製品を配布することができました。

義足	15本
装具	12本
杖	98本
車いす	3人

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

【書き損じはがき・テレカありませんか？】

書き損じはがき、テレホンカード、商品券などありませんか？

お正月にたくさん買ってしまった年賀状や書き損じはがきなど、ワンラブ通信を発送する際の切手などに換えて利用したいと思っていますので、ぜひお譲りください。

【パソコン教室のその後】

2月に障害者の自立を求め、パソコン教室を開いたことは前号の通りですが、コーディネーターとして派遣されていたH嬢が、急遽6月に辞めてしまいました。私たちがルワンダ不在中に辞めてしまったので、理由など細かいことは追及できませんでしたが、恐らく体力・気力とも、ルワンダの現状には合わなかったのでしょう。

というわけで、すぐに新しいコーディネーターを募集した結果、パソコン教室プロジェクトの主体である東北福祉大学を卒業したS嬢が、8月から既にルワンダに来て動いてくれています。

非常に素直で、かわいらしく、わからないことは何でも聞いてくれるので、頼られることが嫌いでない私としては、とても気持ちよくお付き合いをしています。

生徒たちは初級・中級コースを終え、これから上級コースの受講となります。出席率の悪い生徒もいるため、全てが上級コースに移ることは難しい状態ですが、試験をして結論を出したいと思っています。

パソコン教室にかかる費用は全て JICA から援助されるので、プロジェクトとしては資金の心配をする必要はありませんが、それでも新しいコーディネーターは常に節約を心掛けてくれていて、とても頼もしいです。この間も寝泊まりしている部屋の前に、使っていないボロボロの木の箱を捨てておいたら、それを拾って自分の部屋の棚にしていました。

そういう小さな心がけが、きっと大きなプロジェクトにつながっていくのでしょうか。よしや～、がんばれ！

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆様のご意見等を積極的に取り入れたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダ・ブルンジで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

* 発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、

すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

* 当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。
ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 Tel: 0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail: info@onelove-project.info (日本事務所) onelove@rwanda1.com (ルワンダ事務所)

郵便振替口座: 00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信55号 2015年9月

発行: ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>

